2025年8月17日(日)
中国新聞SELECT掲載

JICAだより

ブラジル
浜尾隆誠さん(28)
福山市出身

野球指導 日本式で躍進

国際協力機構（JICA）海外協力隊での私の活動地域は、ブラジルのサンパウロ州でサンパウロ市に次いで人口が多い約100万人の都市、カンピーナス市だった。

配属先機関の東山（とうざん）日伯文化協会は1927年、日系移民により創設された東山農場から土地の寄付を受けて、58年に活動を開始した。以前は日本語教育も行っていたが、生徒数の減少により、現在は野球とソフトボールの活動を主として、地域コミュニティーの活性化や他地域との交流を図っている。

ブラジルの野球はもともと日系移民が広めたため、あいさつは現在でも「よろしくお願いします」や「ありがとうございました」と日本語だ。ただ、世代が若くなるにつれ、日系人指導者不足等の要因も重なり、試合の勝ち負けばかりに意識が向かい、あいさつ、道具の手入れ、時間厳守など日本式の礼儀への意識が薄くなっている。これを、日系1世や2世の方々が危惧して、協力隊員派遣の期待へとつながっているのだと感じた。

監督を務めた13、14歳カテゴリーの選手たちと（後列左端が筆者）

活動では私は13、14歳のカテゴリーの監督を務めた。就任当初、0―15のコールド負けの試合後に敗因を尋ねると選手・指導者全員が「打撃が原因だ」と答えた。私の分析とは違って守備、走塁に関する意識がおろそかだったのである。

練習では走塁と守備の大事さを口酸っぱく伝え、試合のデータを全て記録するようにした。するとチーム打率は下がったものの1試合の平均得点が大幅にアップし、走塁の大事さを理解してくれるようになった。また守備では四球や失策が少なくなり、大量失点が減った。

結果、2024年は最下位だったチームを25年には準優勝に導くことができた。当初は日本式の野球の教え方に半信半疑だった選手や保護者、指導者全員に認めてもらえたものと自負している。帰国後も教え子たちの活躍を交流サイト（SNS）で楽しく見守っている。地球の裏側でこれからも日本の文化や野球が伝承されることを願う。